雛の館－資料５

内裏様の掛物（桜井正太氏蔵）

本品は、作者不明であるが、時代考証を明らかす貴重な作品である。

奥に屏風が見え、その手前に一双の几帳を絵き、繧繝縁の高座に、「天子南面して日の出づる方を上位とする。」その故事に基づいて、向って右を男雛。向って左を女雛とする飾り方に基いていることが伺える。

立雛（槇 孝弘氏蔵）

立雛は室町以降江戸初期ごろまでは、雛の主流をなしている。和紙を材料に、金泥で塗りつぶし絵を画く。或いは、胡粉の置上げなどもある。江戸後期になると和紙に布を裏打ちし一層芸術性を高めていく。本品は山辺町出身の彫刻家石川確治の作品である。（石川氏は、芸大卒昭和３１年７５才他界）男雛２６．５ｃｍ　女雛は１９．５ｃｍで可憐な作品である。

享保雛（河北町所蔵）

太平の元禄が過ぎ、享保年間になると文芸や文化、経済面でも一段と花開き、雛も大型化が流行する。この手の雛を「享保雛」と呼ぶ。金襴地を用い豪華な雛で、４０ｃｍ～７０ｃｍ位までの大型の雛である。本品もその一つで、高さ６５ｃｍと大きい。

三人官女（槇 孝弘氏蔵）

白二羽重の小袖に、赤の長袴姿の女官。即ち、三人官女で殿上人にふさわしく、気品のある面立ちをしている。中央は島台、向って左が提子・右が長柄銚子を持っている官女で大正期の作品であろう。高さ２０ｃｍ。

享保雛（兼子昭平氏蔵）

江戸中期の享保（１７１６～）時代に流行したものといわれており、装束は金襴や綿地をつかった豪華絢爛たるものであった。冠や天冠を別作りとなり、４０ｃｍ～９０ｃｍぐらいに大型化し、豪商豪農の間に普及したものといわれる。本品は、男雛が４２ｃｍ紺地に牡丹紋の金襴地を用いている。

享保雛（小野家蔵）

雛の館－資料５

享保雛は、江戸中期（１７１６～）に、町方の雛としてつくられ、贅をつくしたものであった。享保６年享保改革のお触れがあり、雛も影響をうける。製作にあっては高さ八寸以下と厳しい制約をうけることになる。本品はそれ以後の作品であろう。（高さ２２ｃｍ）

元禄雛（槇 孝弘氏蔵）

本品の頭は非常に古く、冠と頭が一つで髪も冠も墨でぬっている。女雛も同様で、天冠はつけていないのが、この時代雛の特徴である。容姿は享保雛に近い。したがって、時代的変化をうかがうに貴重なお雛さまといえる。男雛は１８．２ｃｍ。

雅楽五人囃子（細谷次朗氏蔵）

五人囃子は、天明（１７８１～）ごろに作り出されたといわれている。主体は雅楽の囃子方を模したものが江戸で作られる。その後寛政（１７８９～）ごろ京都で、雅楽五人囃子が作られたものらしい。本品は瓢箪唐草紋の装束姿に冠をつけている。高さは２４ｃｍ。京都製。

古今雛（細谷次朗氏蔵）

古今雛は明和（１７６４～７２）のころ、江戸の大槌屋が人形師原舟月に作らせ売出したものである。有職雛に見せられた舟月は、精巧ないきいきとした写実性を表現。衣装は金襴や綿地を主流に用いる。当時の婦女子を熱狂させたのである。本品は高さ２９ｃｍで女雛の端袖は有職の幸菱紋の単を用い、容姿からして原舟月系の江戸雛である。江戸製。

五人囃子（有職）（細谷次朗氏蔵）

寛政（１７８９～）ごろ京都に有職の雅楽五人囃子が生まれる。本品は平均して１１ｃｍの高さであり、芥子雛の一種である。向って右から説明すると、羯鼓・龍笛・笙・琴・楽太鼓の順となり、楽師は有紋の装束に冠りをつけている。

古今雛（今田吉兵衛氏蔵）

古今雛は、原舟月によっ

て考案されて以来爆発的な人気を呼び、全国的にこの手の雛が売り出されて行く。
　特徴としては、幕末になると玉眼と称しガラスを入れるようになる。また女雛の端袖に金糸などで縫い紋をほどこしてある。
※本品もその一つである。
高さ２３．５ｃｍ。
　江戸後期。

古今雛（槇 邦彦氏蔵）

　江戸幕末は世情不安の時、この時期は雛の裂地確保も容易でないときであった。一般的に幕末から明治初期の作品は簡易なものが多い。本品は２３ｃｍの高さで、江戸製である。